



会報

松 門

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753 山口市大手町 2-18
山口県教育会館内 TEL. 0839 (2) 1218

松陰先生生誕百六十周年を

迎えて



松風会理事長 松永祥甫

な時期の到来ということになります。

先生は一早く時勢を先き取りし、身の安きは考えずに、四国九州、中国、近畿、東海、北陸、奥羽地方全部を国防的見地から研究視察、傍ら先覚者を訪ね、更に自らの学問研究にも孜孜として怠るところはありません。

「天下漸く変革の兆あり」と喝破し、幕府の時局対応に決断無しと見ては「官よくこれを断行することなし、予が航海の志、実にここに決す」として踏海の挙に出ますが、失敗に帰し、郷里萩野山獄の人となり、ここでは一年二ヶ月間に六百十八冊の読書という精力振り、その傍ら司獄（刑務所長）を含めた囚人の人間教育、許されて生家の家囚となつては家人への孟子の講義、やがて風を望んで私淑する者が相次ぐようになって松村塾が形成されます。

塾教育の主眼点は志を立てよ「立志万事の源を成す」でその志は直面する民族の危急を救い日本国の独立を守り、国家の繁栄に貢献し、国民の生活を安定させるため新しい国を建設することを内容とするものであります。

更に最近新刊の名著「明治長州の三宰相」（著者徳山大学理事長三好啓治氏）の中にも松村塾での松陰先生と門人との係わりが明確に述べられてあります。

何れにしても松陰先生は、私どもに不滅の光を与えて下さり、日本国の進展と共に永久に生き続けられる方であります。

松陰先生は天保元年（一八三〇年）寅年、八月四日、萩郊外松本村（今の萩市）の毛利藩士杉百合之助の次男として生まれ、幼名は虎之助、後に寅次郎と改められました。丁度今年が生誕百六十周年に当たります。生誕地萩市はもとより山口県としても数々の記念事業が目論まれておりますが、これとタイアップして、本会も山口県教育会と共催で、吉田松陰テーマ展、松陰輪読会、記念講演とシンポジウムの集い、山口県学校剣詩舞道大会、青年教師松陰研修会等が次々と開催いたします。

今、わが国は世界の経済大国として国際間に重要な役割を担って行く責任の地位におかれておりますが、その偉大さは畢竟国民の英知と勤勉、根本には教育尊重に外なりません。ここまで到達した日本は、再び前車の轍を踏むことがあってはなりません。国際間に信頼を増幅し人類の福祉に貢献する国となることが、日本国の今後進むべき道と考えられます。一層胸襟を開いて、国際感覚を身に付けることを志し、自己を高めることが国民共通課題と存じます。このように考えますとき、今一度先生の生涯を一瞥することも無意味ではないと信じます。

先生は質実にして勤労に励み学問を尊重する家系、家庭に生まれ育ち、特に山鹿流兵学の師範家である吉田家を継いでからは兵学を志し、二十二歳で該兵学の奥義に達し、極秘三重伝という最高位の免許を受けておられます。先生の成長期は、幕藩体制が経済的にも破綻に瀕して来ており、且つ欧米諸国の重圧の加つて来た時代で、国民的意識の自覚を要する、極めて大切な時期の到来ということになります。

松陰精神の 継承と発展を



山口県議会議長
河野博行

本年は、松陰先生生誕一六〇周年という記念すべき年でありますが、今日、松陰先生の御遺志が我が山口県民の心の中に脈々と受け継がれておりますことは、誠に喜ばしい限りであり、また誇りでもあります。

松陰先生は、孟子の「至誠にして動かざるもの、未だ之れ有らざるなり」の言葉を信じ、非常なる覚悟の下に果敢に実行に移され、日本中の志ある者に救国の使命感と勇気を呼び起こさしめ、明治維新の原動力として、尊い生き様を後世の人々に示されたのであります。

最近、青少年にかかわる痛ましい事例を聞く度に、慈愛の精神をもって弟子達の個性を伸ばす教育をされた松陰先生の教育精神の普及の重要性を改めて痛感するのであります。

私も一政治家として、松陰先生に習い、時代に対する先見性

を持ち、県民の皆さんに夢と希望を与える明るい未来への展望を提示し、その先頭に立って、「死して後已む」の精神で事に当たる決意を新たにしているところであります。

どうか、松風会におかれまし

松陰の郷関と道

志・歴史・情報・至誠

松風会理事 三輪稔夫



萩―明木間の旧萩往還に沿って超近代を象徴する有料道路が企画され建設中である。萩往還

はそこにそのままかつての姿を露呈し、萩市街とその近郊は過ぎし遺跡を多く維持して前近代を語りかける。豊かな自然と歴史と文化を生かして近代後の地域活性化を方向付ける観を感じずにはおれない。

シュペングラの『西欧の没落』を取り出すまでもないが、西欧の文化文明が唯一絶対でないことは彼の論旨である。しかし日本がその異質・特殊性を主張しても始まらない。普通の舞台で英知をもって検討を要する今、世界は二極構造が崩れ、激

ても、山口県の更なる発展のため、二一世紀を担う青少年を始め、県民各界各層に対し、伝統ある防長教育の根幹である松陰教育の普及啓発に、一層の御尽力、御活躍を賜りますよう、念願する次第であります。

が械ヶ坂全体のほぼ中央にあつて、萩から械ヶ坂に取り着く処に涙松の遺跡があり、械ヶ坂を東に越して少し歩くと明木橋である。

松陰との関係で最も有名であるのは涙松である。安政六年五月十五日、松陰を乗せた護送の駕籠が大屋の涙松の根かたに止められた。ここは萩城下が一望できる。護送役も松陰に、故郷との別れを思いやり、ゆっくりとわらじの紐を締め直して休憩を取った。松陰は萩城と自宅の方向を見渡して、

帰らじと思ひさだめし
旅なればひとしほぬる
る涙松かな

と、訣別の一首を詠んだ。幕吏に対して「至誠の実験」を志しての東送である。

関所があるわけでないのに、郷関をどこに設定するかは、地形や施設や個々の思いで違って差し支えない。松陰にとっては涙

松であり、械ヶ坂の急坂を越したところであり、明木橋でもあった。

松陰最初の藩外遊歴は嘉永三年八月二十五日、二十一歳、九州平戸を目指した途であった。『西遊日記』巻頭に「晴。早発。械ヶ坂を越えて夜明く」とある。

この日記の序は九月にできる。

道を学び己れを成すには、古今の跡、天下の事、陋室黄卷（狭い部屋での読書）にて固より足れり。豈に他に求むることあらんや。顧うに、人の病は思わざるのみ（一般に人の欠点は書物の知識だけで思考を広げない）。則ち四方に周遊するも何の取る所ぞと。曰く

（松陰の答）「心はもと活きたり、活きたるものは必ず機（心のはずみ）あり、機なるものは触に従って発し、感に遇いて動く。発動の機は周遊の益なり」と。西遊日記を作る。

すなわち、読書情報だけでは志とその実現に不安がある。藩内はもとより他藩の事物、天下の現情に直接触れ、歴史や地理、人物や文化を結び、感動を誘う学問にまで高め深めなければならぬ。かつて十六歳、藩の長老村田清風を訪ねた。

諸国を遊歴せんければ駄目だ。この城下の片隅に蹲んでばかり居っては、書物の虫になるばかりだ

と教えられた。この『四峠論』をかみしめる松陰であった。

更に松陰には、明木橋を郷関とし、志を主題とした詩がある。

安政元年十月二十四日、松陰二十五歳、金子重之助と共に二つの唐丸籠での帰郷の際である。前日の夕刻、明木駅に着いたところ、四人の護送役が松陰の籠

のそばに来て、「引渡し処は野山屋敷福川屏之助云々」と伝えた。「杉百合之助へ引渡し、在所に於て蟄居」とは異なる。金子は出獄の時から「病篤く、氣息奄々」、苦しみ通しである。明くれば二十四日、白昼罪人を運ぶ唐丸籠で萩御許町を通って野山獄と岩倉獄に着くことになる。松陰は出獄以来、五言古詩で雑感を綴ってきた。明木橋で次の詩を残した。

少年志すところあり
柱に題して馬卿を学ぶ。
今日檻輿の返、
是れ吾が昼錦の行。

明木橋を過ぐ、橋は萩を去る二里なり。予幼時ここを過ぎ、戯れに司馬相如昇仙橋に題するの語を題す。今又ここを過ぎ、之を思つて慨然たり。

この詩を単純に解すれば、少年時代に明木橋を過ぎて以来の志を貫いた結果、今日、唐丸籠で罪人としてのお国入りとなった。しかし、われ等二人は心に錦を着て、白昼、城下の人びとの前

に姿を現わすのだ。「重之助よ。よいか。そうだぞ」と、金子を励ますための松陰の呼びかけでもあった。

たしかに『五十七短古』全体を通観すると、護送の厳しさもあって後悔や無念さが随所に感ぜられる。「余、獄を出でて国に至る、浴せず流らず」とか、「非才」、「志漫りに大きく」、「蹉跎(しくじって捕われの身となった)して実体のない「虚名」を悲しむ詩が目につく。一方、「浩然の氣」、「雄飛の心」、「報国の念」なども見逃せない。そこまで広げなくて、この詩だけについてみても、松陰の思

いがぎっしりつまっている。松陰は少年時代(幼時と後語にある。従弟玉木彦介の元服を祝した歌に、「今日よりぞ幼心を打ち捨てて人となりにし道を踏めかし」、多分十五歳に近づいたころ明木橋を渡った。前漢成都の司馬相如(字は長卿)が若いころ長安の都に行く途中、昇仙橋(蜀城の北十里にある)の柱に「赤車駟馬(四頭立の馬車王候をさす)に乗らずんば汝の下を通らず」と題した故事を思い出し、松陰も明木橋の柱に題した。すなわち松陰は自分の字を「義

卿」と決めることにした。字は自分でもつけるが、多くは師につけてもらい、人生の理想、士の志を示すもの。松陰は義を重んずる人になろうと、馬卿(長卿)に見習った。「戯れに」から察せられることは、帰還はどうみても高位高官ではない。しかし、この詩は卿以上の誇りもある。松陰は二十歳以後一時盛んに今一つの字「子義」を用いた。「義卿」と同義であるが、微妙な相違も感ぜられる。

事実、藩府は松陰たちを厄介者扱いにし、重罪犯人として白眼視した。ただ村田清風は次のように讃えた。

是れは極くよい事をやつてくれた。何か思い切った事をせんければ役に立たぬ。ぐずぐずして居てはちががあかぬ。……

事の成敗はどうなるともその志を天下に顕わしたら、心は既に西洋に行っているわけではないか。これが事の端緒というものじゃ。『村田清風翁事蹟』

以上三ヶ所の郷関は、松陰の志の重要な起点で、拡充・深化・実現への機の希求点となり、ついにその終点でもあった。立志は、実学を重視する山鹿流兵学では逃すわけにいかない。

この伝統が明治を導いた。松陰は六歳で家職を受け、ただちに叔父で父執(父の友人で父志を伝える)でもある玉本文之進から家学と経学の指導を受け、常に「苟くも報国の念あらば慎んで凡士となる勿れ」と戒められた。「報国の念」が志の大方向を示し、何を具体的に決めて進むかは学問によって松陰自ら発見する以外にない。「凡士」ではできないことである。志は学問・実行の過程が実学と呼ばれ、士は農工商等の道德的模範となり、またそれを指導して始めて社会的責任を果すこととなる。『西遊日記』序文巻頭の「道を学び己れを成す」、「学道成己」がこれに当たる。『講孟割記・尽心下第八章』に「余孟子の読を受けてより二十年」とある。安政三年の松陰は二十七

歳であるから、七歳で『孟子』を、意識的に始めている(幼児の素読は別)。義は孟子の義を感じ得たと察せられる。

次に『割記・万章下』で、「孟子の学経史を兼ね」と松陰は書く。歴史とはただ過去を研究することではない。昨日の自分を思い出すと同じく、過去を甦えらせる人であって歴史家の名に

価する。松陰は歴史の事実を過去からの情報として眼光紙背に徹する読に高めた。と同時に今は「為すあらんと欲するに非ずや」として、「書は古なり、為は今なり」の学問態度を身につけた。更に嘉永四年第一回江戸留学時、個別的な古人の勉学や事業を鑑とする程度でなく、本格的に『史記』から始めなければと気付き、また水戸では日本史研究に触発される。結局、歴代の史を歴観し、その断じ難き所は古人の衆論を以て己が工夫を加えれば人間の大義自ら明かならん」と考えるようになる。

また、西遊や東北遊等で明確に得た今日の国防・民生情報はペリー来航によって現実の守備範囲となり、松陰は次第にこれを『俊傑の学論』へと高めていく。魁は常に反感を買い、死さえ覚悟しなければならぬ。天の使命と体して、至誠の実行以外にない。松陰は海外の情報をも道の連続として急務と考え、名づけて、「下田踏海の挙」とした。しかし、失敗に終わった結果、松下松塾の後起人の育成となるが、松陰憂国の実学は、一言一句が魂から魂への呼びかけとなり、その活力の發揮へと繋がる。

小さな歩みを続ける

徳山松陰会



世話人 瀬島 肇

今思えば十四年前である。私は徳山市立馬島小学校長として赴任することになった。学校経営の抛り所を「松陰の心に求める」ことを胸に秘めての着任であった。

に授業を実施したりもした。そのころ一緒に取り組んだ先生方が、現在各地の学校で素読教育を実践されていると噂に聞き、うれしい限りである。

退職後、縁あって徳山大学松

陰会に再就職。そこでの仕事の一つに「学生信和会」があった。

当時、徳山小学校では河口正人校長先生が「素読教育」を実践しておられた。以前、『教育実践』（山口県教育会発行）紙上に、三輪先生が、松陰幼少時代の素読を通しての『素読暗誦考』を書かれておられたのでその内容に深い感銘を覚えるとともに、学校教育に取り入れ、実践したいと考えていたところだった。さっそく、私は河口先生のご実践に学び、学校の先生方と相談し、協力を得て、四・五・六年生を対象にして実行に移してみた。以来八カ年継続。また、毎月一回の学年別の学年集会で、『松陰読本』を教科書

に授業を実施したりもした。そのころ一緒に取り組んだ先生方が、現在各地の学校で素読教育を実践されていると噂に聞き、うれしい限りである。

今会員十六名だが、仕事の都合もあって平素は七、八名の集まりになる。私たちは三名になっても、この会を継続実行していこうという合言葉で今日に及んでいる。同会員で専門に松陰研究をしている者はいないが、各自各様に勉強して集まってくる。時には指導者を招いて指導助言を受けたいとの要望もあるが、諸般の事情で思うにまかせないのが実状である。また世話役の私自身が、十分なお世話をなしないにもかかわらず、各会員の情熱と努力に支えられて、松陰会は着実に推進されてきた。

徳山は、吉田松陰の思想を継ぎ、その教育の実学体現者として生き抜かれた故玖村敏雄先生の出身地である。その先生を私たち会員は抛り所としている。会員の求めている玖村先生の著書として『吉田松陰』（岩波）

『吉田松陰の思想と教育』（岩波）等がある。

同時期に、河口先生が市民・教員有志で結成されていた徳山松陰会の世話役を私が引き受けることになり、今年で六年目を迎える（結成されてからは七年目）。この会には組織も規約もなく、出入りも自由である。唯

玖村先生が亡くなられる直前に完成されたものである。玖村先生の伝記としては『玖村敏雄先生伝』（辻信吉・ぎょうせい出版）がある。



玖村先生の御生家

玖村先生が亡くなられる直前に完成されたものである。玖村先生の伝記としては『玖村敏雄先生伝』（辻信吉・ぎょうせい出版）がある。



玖村家の墓前にて

徳山市大字下上の菊川公民館の前庭には「玖村敏雄先生像」が建てられている。玖村先生が広島高等師範学校で教鞭を執っていた昭和十年ごろ、故玖村敏雄・故西川平吉両先生を中心に、毎週一回、松陰読書会が開かれていた。この像は、その時の門弟たちを中心に建立されたと聞く。



先生の胸像の前で

当時玖村先生に師事していた川上喜藏先生（現在呉市在住、『僧黙霖と吉田松陰の往復書簡』の著者）は、八十二歳というご高齢にも関わらず、玖村先生の正月命日には今も墓参されている。また、門下生の一人である吉村忠幸先生（現札幌市在住）は、札幌大学女子短期大学部研究紀要に「吉田松陰の教育像」



輪読をする会員

幸い昨年二月、三輪稔夫先生

という論文をまとめておられる。このお二人に巡り合うことができた。そこで、これを機会に、当時の松陰読書会の様子を拝聴して、私たちの会の指針にしていく次第である。

徳山松陰会は、毎月第二、四木曜日の午後六時から二時間、徳山市民館を会場にして、輪読会をしている。今、輪読資料として『講孟余話』（近藤啓吾註・講談社文庫）及び『孟子』（小林勝人訳註・岩波文庫）を用いている。吉村忠幸先生からは「なるべく原文をくり返し読むこと」をお手紙で助言をいただいていたが、難解箇所が多く、力無さを感じている。私たちの歩みは遅々として進まない。

をお招きしてご指導をいただく機会を持つことができた。当夜の研修は、会員が平素抱いていた質疑から始まった。先生は私たちの質疑を中心に講義をされ、また、質疑の上に立ってのご指導をしてくださった。最後に憂国の志士吉田松陰の「俊傑の学」について講義をされた。「国體を明かにする」「時勢を察する」「古今明主賢相の事蹟を審かにする」「萬國治亂興亡の機關を洞かにする」等、現代の教育界で問われているものに通ずるところばかりで、会員一同深い感銘を受けた。松陰の、今何をなすべきかという「時務」の解決のための学問は、教育に携わるものに大いなる示唆を与えてくれた。

これを契機に会員の意識はより確かな自覚に高まっていったように思う。なおこの夜の講演の様子は、会員の手で文字化し、冊子にしてある。

私たちの松陰会では、その一か年の歩みを中心に、会員各自の考えや研究を会報にしてまとめている。誰言うことなく輪読を終わって、ついこのままにしておくのは何としても惜しい。自分なりに感想なり、これから得た課題への取り組みなりをまと

めておこうということになり、冊子（会報）にしたのが始まりである。それが現在五号までに至っている。手前ごとで恐縮だが、執筆者延べ五〇名、総数二四四ページに及び、多忙な中で執筆にあたられた会員の方々の真摯な気概が伝わってくる。私たちの会の分身ともいえるものであり、今後もぜひ継続していきたいと思っている。

今日、価値観の多様化がよくいわれている。自分の価値観、哲学の根拠となるものは、いろいろあつて当然しかるべきであろう。ただ問題なのはその根拠を持っていない場合である。

国際理解のためには、他国の文化の理解と同時に自国の文化の理解が必要である。さらに郷土の理解を抜きに自国の文化は語れない。ギリシャをはじめとするヨーロッパ人は二千年以上昔の自国の教育者・哲学者たちを誇りとし、彼らの考えを今も勉強している。同じように山口県にもわずか百年ちょっと前にすばらしい教育者・哲学者である吉田松陰がいた。

外国人に日本のことを尋ねられて分からないことを私は非常に恥ずかしく感ずる。同様に、

他県の人から、郷土出身の松陰のことを尋ねられて、答えることができない人を見る時や、他県の方が研究が盛んと聞かされる時、非常に恥ずかしく感ずるとともに、一抹の寂しさを覚える。情報化の時代であるから、生きる根拠となるものにふれる機会は多いだろう。ただ、山口県にいればその根拠の一つになり得るもの、即ち松陰にふれる機会が特に多くあることを、若い方々に知ってほしい。

最後に同会のメンバーで、青年教師である M 氏・N 氏が最近『教育実践』に投稿した論文の一部を紹介して、本文の終わりとしたい。

「…生きる拠り所、「志」を持つことの大切さは誰しも心得ていようが、実際はなんとなく毎日過ごしていることが多いのではあるまいか。将来への夢や希望が希薄になりがちな今日、幕末の過酷で熾烈な体験者の松陰の言説は私たちにいかに「生きる」かということを鼓舞してくれる。…会員と討論を重ねているうち、いつしか閉会の時刻となつていく。その日解釈した分量は僅かばかりで、二・三ペーシのこともしばしばである。

結論が出ぬままに終わることもある。やはり各自が抱える課題は、そう簡単に解決できるものではない。むしろその討論の中で、また新たな課題が生じてくることもある。しかし、この輪読会を通じて「生きること」「信じること」等を模索した時間は大きな充実感、満足感を与えてくれる。…」

「…先日の徳山松陰会での論点は、この『講孟割記』は誰のためにつくられたものかということであつた。時の権力者（武士）に向けてか。つまり、松陰がこの『講孟割記』で述べている思想が、前者ととるか後者ととるかで、変わってくるのではないかと感じられたからである。解釈を誤ってはいけないという危うが私の頭にあつた。

しかし、ある会員から、「あなた自身は、どう考えますか。」と質問された。これだと思った。松陰がどう考えたかは今問題ではない。松陰の思想から、自分自身は何を学びとるのか、松陰教学の何を自分に生かすのか、そこが重要なのである。

まさにこれだと思う。今の世の中を見るにつけ、松陰から得るヒントは数多い。…」

松風会の趣旨



明治維新の先駆者であり、殉国至誠の人である吉田松陰先生は、安政六年、いわゆる「安政の大獄」の累を負うて、江戸伝



松下村塾正面

馬町の獄で刑死された。昭和三十四年はその殉節百年にあたるので、これを契機として松陰精神作興を図ろうという気運が高まった。そこでまず昭和三十一年松陰先生百年祭記念事業推進会が発足し、県内外有志の浄財と県・市町村の補助金千四百万

円をもって記念事業を興すことになった。その中核事業は、一千余万円をもって鴻の峯山麓の大神宮に隣接する地に松風寮を建設することで、昭和三十六年五月その完成をみることで、山口県教育会がこれを主宰した。松風寮は、松下村塾の故知にない、青年学徒に純真な寮生活の場を提供して、松陰精神にあやかると願う精神教育施設であり、昭和四十九年この事業の特殊性にかんがみて、財団法人松風会として独立した。松風寮は経営二十一年、その間山口大学男子学生六百余名を入寮させ、松陰先生の遺志を継承する有為な青年として全国各地に送りだしてきた。しかし、昭和五十七年三月、市道改修工事のためやむなく寮を閉鎖することになった。松風会は昭和五十

八年一月新装なった山口県教育会館に事務所をうつし、吉田松陰先生を崇敬し、松陰精神の普及振興をはかり、併せてこれを現代に生かすことを目的に次の事業を行っていくことにしている。



松風寮建設の功労者

熊野隆治先生



建設途中の松風寮(昭和35年)



松風寮旗の下にて



松風寮中庭



松風寮正門



昭和36年度松風寮第1回入寮生



松風寮玄関

松風会の事業

- 1、吉田松陰先生関係資料展示室の整備充実
 - (1) 既出版図書・新刊図書の購入・収集・整理
 - (2) 関係研究物・記事等の収集・整理・展示
 - (3) 絵画・書・写真・拓本等の収集・整理・展示
- 2、吉田松陰先生研究の奨励と助成
 - (1) 研究者・研究団体の調査・連絡・育成・助成
 - (2) 松陰先生ゆかりの地の実地踏査
 - (3) 資料の頒布・斡旋（「東送之碑」碑文色紙）
 - (4) 松陰先生関係研究室としての利用
- 3、講演会・研究会等の開催
 - (1) 松陰先生に関する講座の開設
 - (2) 松陰先生に関する講演会・研究会の開催
- 4、機関誌・印刷物の刊行
 - (1) 松風会会報「松門」の発行
 - (2) 松陰先生関係印刷物の刊行「松陰教学シリーズ」
- 5、松陰先生関係の碑・銅像等建設事業



吉田松陰先生東送の碑



指導講話



吉田松陰先生生誕地跡での研修



「吉田松陰入門」をひもとく



会報「松門」



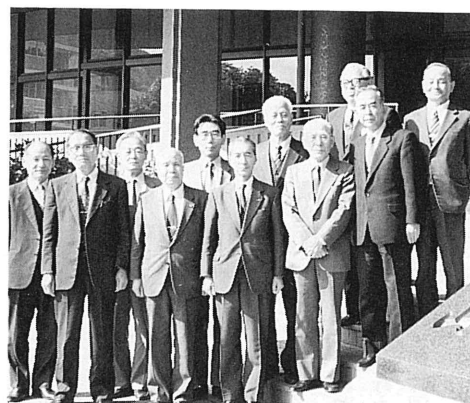
研究グループの発刊誌



松陰教学シリーズ

平成 2 年度 財団法人松風会 役職員一覧

役職名	氏 名	郵便番号	住 所
理事長	松 永 祥 甫	747-12	山口市大字鑄銭司6428番地の1
理 事	二 木 秀 夫	755	宇部市東新川町 3 番 5 号
理 事	山 本 重 治	753	山口市古熊一丁目 6 番 1 号
理 事	三 輪 稔 夫	754	吉敷郡小郡町大字下郷707番地の7
理 事	大 田 恭 次	753	山口市大字朝田807番地の1
理 事	谷 口 不 二 彦	753	山口市白石一丁目14番6号
理 事	岩 本 肇	759-45	大津郡油谷町大字伊上3283番地
理 事	河 村 太 市	747	防府市上右田新町1718番地
理 事	東 條 孝 和	753	山口市元町 1 番 2 号
監 事	陶 山 長	747	防府市大字高井1042番地の1
監 事	藤 沢 菊 治	753	山口市錦町 1 番 35 号
事務局長	藤 永 寿 敏	753	山口市大手町 2 番 18 号 山口県教育会館内



松風会役職員（平成 2 年度）

好永文庫

松門第一〇号で若干お知らせしましたが、本年六月二〇日、山口市歴史民族資料館長内田 伸氏の御高配により、吉田松陰先生関係図書・資料等多数寄託を受け研究の推進に資することができるとなりました。

本会は、

御厚情に感謝いたしますとともに、御趣旨に副うべく、閲覧の促進と保全に努めているところであります。

元の所有者、好永忠行先生の御遺徳をしのび『好永文庫』と呼称することに

しました。

資料展示室

好永文庫関係資料の概要

1 寄託図書

○書籍 二八〇種・三四六冊
○雑誌 一二種・二〇冊

2 寄託関係資料

○絵ハガキ 六袋
○写真 九枚
○松陰研究ノート 一〇冊
○掛軸 一七幅
○松陰の絵と説明各一一枚
好永忠行先生のプロフィール

明治三八年御生誕

大正一五年

広島師範学校本科御卒業

・広島県下の小・中学校に

四〇年間御勤務

・平成元年三月一五日

八四歳にて御逝去

◎青年のころから

吉田松陰に傾倒される

松陰関係の論文・伝記、さらに松陰の著書の松下村塾刊等あらゆる文献を読破されている。

それらの巻末に〇年〇月〇日読了と書かれているものが、極めて多いことから、これら大量の文献・資料等は、コレクションとして収集されたものではなく、まず御自分で読破・研修されたものと推察される。

御逝去の一〇日前まで、読書にいそしんでおられたと聞いているが、その真摯なお人柄がしのばれる。

御遺族は広島市に御在住。

＜好永文庫＞



図書紹介 ①

○七書直解(一〜一四)
栗山立甫著寛永廿年木版
弘化元年九月、松陰一五歳のとき、藩主毛利敬親・藩親試において、松陰は『武教全書』の進講を終ったところ、さらに藩主の求めによって『孫子・虚実編』

掛軸紹介 ①

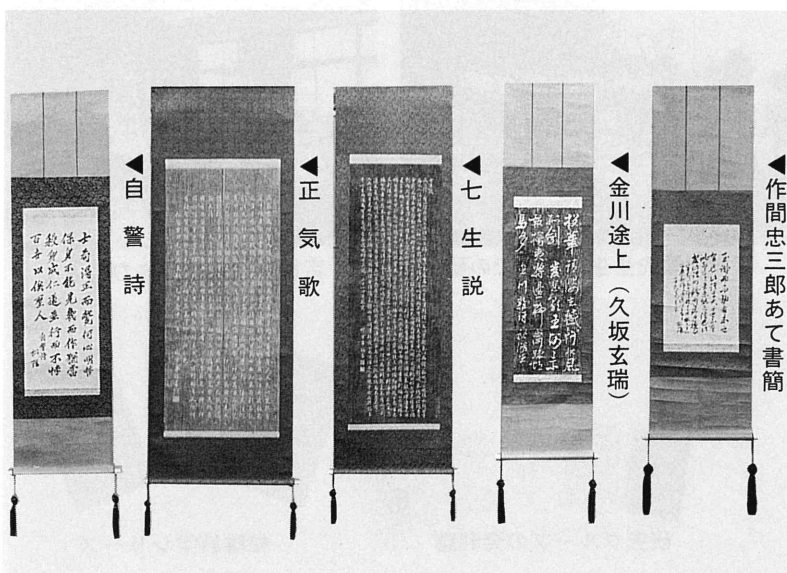
▲作間忠三郎あて書簡

▲金川途上(久坂玄瑞)

▲七生説

▲正気歌

▲自警詩



を講じることとなった。藩主はのできばえをほめたたえ『七書直解』一四冊を松陰に与えた。本書は、褒賜の『七書直解』と同種のもので察せられる。『七書直解』は中国の孫子、呉子等武教七書の注解である。

○保建大記打聞

栗山立甫著 正徳四年

○保建大記序 上・下

栗山立甫著 正徳六年

『保建大記』は徳川光圀の儒臣栗山立甫の著で、保元から建久に至る三十八年間の大事件を記録し論評を加えたものである。「打聞」とは『保建大記』を解説したもので「序」は『保建大記』の序文である。松陰は自著『講孟割記』の附尾に「保建大記を読む一条」を書いている。

△編集後記▽

御生誕一六〇年記念にふさわしい玉稿を賜りその上、好永文庫の開設をみましたこと御同慶の至りに存じます。

